

2018年4月26日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 迷いと苦悩

### 1. 概要

#### (1) 資料

増谷文雄著『阿含經典1』ちくま学芸文庫／存在の法則（縁起）に関する經典群／因縁相応／02分別

#### (2) 主題

十二支縁起の各支の意味を、經文から学び、考察してみたいと思います。

### 1. 縁起

#### (1) 經文「分別」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジュータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。その時、世尊は、比丘たちに告げていった。

「比丘たちよ、わたしはいま汝らのために、縁起を分析して説こうと思う。汝らはよくそれを聞いて、考えてみるがよろしい」

比丘たちは、

「大徳よ、かしこまりました」

と答えた。世尊は説いていった。

「比丘たちよ、縁起とはなんであろうか。

比丘たちよ、無明むみょうによりて行ぎょうがある。行ぎょうによりて識しきがある。識しきによりて名色みょうしきがある。名色みょうしきによりて六処ろくしょがある。六処ろくしょによりて触そくがある。触そくによりて受じゆがある。受じゆによりて愛あいがある。愛あいによりて取しゆがある。取しゆによりて有うがある。有うによりて生しょうがある。生しょうによりて老死ろうしがあり、愁しゅう・悲ひ・苦く・憂ゆう・悩のうがある。かくのごときがこの苦の集積のよってなれるところである」

（増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.129~130）

#### (2) 十二の縁起支

ここには、十二支縁起が述べられています。

このあと、これらの縁起支の一つ一つについて、その意味が説明されます。

2. 経文「分別」

縁起支	経 文
老死 老 死	<p>では、比丘たちよ、老死とはなんであろうか。</p> <p>生きとし生けるものが、老い衰え、朽ちやぶれ、髪しろく、皺生じて、齢かたむき、諸根やつれたる、これを老というのである。</p> <p>また、生きとし生けるものが、命おわり、息絶え、身軀やぶれて、死して遺骸となり棄てられたる、これを死というのである。</p> <p>かくのごとく、この老いとこの死とを、比丘たちよ、老死というのである。</p>
生	<p>また、比丘たちよ、生とはなんであろうか。</p> <p>生きとし生けるものが、生まれて、身体の各部あらわれ、手足そのところをえたる。</p> <p>比丘たちよ、これを生というのである。</p>
有	<p>また、比丘たちよ、有（存在）とはなんであろうか。</p> <p>比丘たちよ、それには三つの存在がある。</p> <p>欲界すなわち欲望の世界における存在と、</p> <p>色界すなわち物質の世界における存在と、</p> <p>無色界すなわち抽象の世界における存在である。</p> <p>比丘たちよ、これを有というのである。</p>
取	<p>比丘たちよ、また、取（取著〔しゅじゃく〕）とはなんであろうか。</p> <p>比丘たちよ、それには四つの取著がある。</p> <p>欲にたいする取著、</p> <p>見〔けん〕（所見）にたいする取著、</p> <p>戒（戒禁〔かいごん〕）にたいする取著、</p> <p>我〔が〕にたいする取著がそれである。</p> <p>比丘たちよ、これを取というのである。</p>

<p>愛</p>	<p>比丘たちよ、では、愛（渴愛）とはなんであろうか。</p> <p>比丘たちよ、それには六つの渴愛がある。</p> <p>物にたいする渴愛、</p> <p>声にたいする渴愛、</p> <p>香にたいする渴愛、</p> <p>味にたいする渴愛、</p> <p>感触にたいする渴愛、</p> <p>法にたいする渴愛がそれである。</p> <p>比丘たちよ、それを愛というのである。</p>
<p>受</p>	<p>比丘たちよ、では、受（感覚）とはなんであろうか。</p> <p>それには六つの感覚がある。</p> <p>眼の接触によりて生ずる感覚、</p> <p>耳の接触によりて生ずる感覚、</p> <p>鼻の接触によりて生ずる感覚、</p> <p>舌の接触によりて生ずる感覚、</p> <p>身の接触によりて生ずる感覚、</p> <p>ならびに意の接触によりて生ずる感覚がそれである。</p> <p>比丘たちよ、これを受というのである。</p>
<p>触</p>	<p>比丘たちよ、では、触（接触）とはなんであろうか。</p> <p>比丘たちよ、それには六つの接触がある。すなわち、</p> <p>眼による接触、</p> <p>耳による接触、</p> <p>鼻による接触、</p> <p>舌による接触、</p> <p>身による接触、</p> <p>および意による接触がそれである。</p> <p>比丘たちよ、これを触というのである。</p>

<p>六処</p>	<p>比丘たちよ、では、六処（六根六境によってなる認識）とはなんであろうか。</p> <p>眼の認識と、          耳の認識と、          鼻の認識と、          舌の認識と、          身の認識と、          意の認識とである。</p> <p>比丘たちよ、これを六処というのである。</p>
<p>名色</p> <p>名</p> <p>色</p>	<p>比丘たちよ、では、名色（五蘊）とはなんであろうか。</p> <p>受（感覚）と          想（表象）と          思（思惟）と          触（接触）と          作意（意志）と、          これを名というのである。</p> <p>また、四大種（地・水・火・風）およびそれによって成れるもの、これを色というのである。</p> <p>つまり、そのような名とそのような色とを、名色というのである。</p>
<p>識</p>	<p>比丘たちよ、では、識（識別する作用）とはなんであろうか。</p> <p>比丘たちよ、それには六つの識がある。すなわち、</p> <p>眼識と          耳識と          鼻識と          舌識と          身識と          意識とがそれである。</p> <p>比丘たちよ、これを識というのである。</p>

<p>行</p>	<p>比丘たちよ、では、行（意志のうごき）とはなんであろうか。                  比丘たちよ、それには三つの行がある。すなわち、                  身における行と、                  口における行と、                  心における行とがそれである。                  比丘たちよ、これを行というのである。</p>
<p>無明</p>	<p>比丘たちよ、では、無明（無智）とはなんであろうか。                  比丘たちよ、                  苦についての無智、                  苦の生起についての無智、                  苦の滅尽についての無智、                  および苦の滅尽にいたる道についての無智である。                  比丘たちよ、これを無明というのである。</p>

(増谷文雄編訳『阿含経典』ちくま学芸文庫、p.130~132)

### 3. 流転縁起・還滅縁起

#### (1) 経文「分別」

「比丘たちよ、かくのごとくにして、無明によりて行がある。行によりて識がある。……これがこのすべての苦の集積のよりてなるところである。また、無明をあますところなく滅することによって行は滅する。行を滅することによって識は滅する。……これがこのすべての苦の集積のよりて滅するところである」(増谷文雄編訳『阿含経典』ちくま学芸文庫、p.132)

#### (2) 流転縁起

十二支縁起の「無明によりて行がある。行によりて識がある。……生によりて老死がある」という流れを「順観」と言い、また「流転縁起」と言います。

#### (3) 還滅縁起

十二支縁起の「無明をあますところなく滅することによって行は滅する。行を滅することによって識は滅する。……生を滅することによって老死・愁・悲・苦・憂・悩が滅する」という流れを「逆観」と言い、また「還滅縁起」と言います。

#### 4. 「生」と「老死」に関する若干の考察

##### (1) 年代別の呼び名

世間には、年代別の呼び名があります。例えば次のようなものです。

「新生児・乳児・幼児・児童・少年（少女）・青年・壮年・中年・老年」

##### (2) 「生」と「老死」

縁起説の「生」は、新生児を思わせます。

「老死」は、老年期と死を思わせます。

「生」と「老死」の間にあるはずの「乳児・幼児・児童・少年（少女）・青年・壮年・中年」が、縁起支には表現されていません。

「老」が衰えを意味していますから、それ以前の年代は「生」に含めてあると考えてよいのではないかと思います。

#### 5. 「無明・行」に関する若干の考察

「無明」は、四つの聖諦に対する無智であるとあります。これは、執着（渴愛）を滅することができないことを言っていると受け取れます。

このため、「無明」を縁として生じる「行」は、執着（渴愛）に汚染された「身における行・言葉における行・心における行」になると思います。

#### 6. 「識」に関する若干の考察

「識」は「識別作用」とあります。眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの識別作用によって、自分を識別し、自分はこういう存在であると認識するのでありましょう。

「自分に対する誤った認識」を「我〔が〕」と言います。

「自分に対する誤った認識が無い」ことを「無我」と言います。

#### 7. 「識・名色・六処」に関する若干の考察

##### (1) 「識・名色・六処」

「識」は「識別作用」。「名色」は「心と体」。「六処」は「認識作用」。これらを総合すれば、「識・名色・六処」は、一人の人を表していると見ることができます。

##### (2) 「生」と「識・名色・六処」

「生」の説明に、「身体の各部あらわれ、手足そのところをえたる」とあります。

これは「識・名色・六処」が揃うことを言っていると受け取れます。

## 8. 執着と苦悩に関する若干の考察

### (1) 「愛・取・有」と「無明・行」

「無明・行」が、「識・名色・六処」を生み出します。

「愛・取・有」の営みが「生」すなわち「識・名色・六処」を生み出します。

「無明・行」と「愛・取・有」は、同じ内容を、別の表現で言っているのではないのでしょうか。

### (2) 執着と苦悩

「愛・取・有」は、執着の営みです。「無明・行」もまた、執着の営みです。

執着は苦悩を生み出しますから、「愛・取・有」、「無明・行」は、苦悩を生み出す営みであるということが出来ます。